



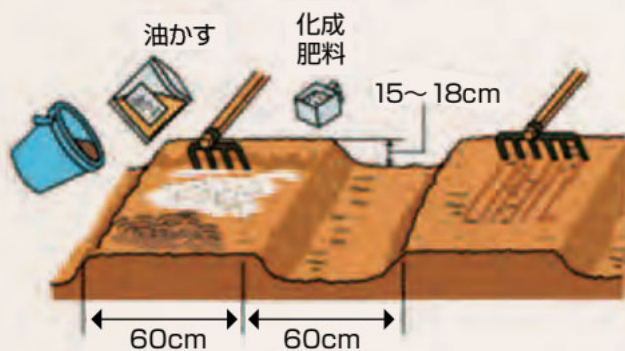
## イチゴの植え付けと 管理の要点

イチゴは苗づくりから始めると栽培期間が1年近くもかかり、収穫は露地栽培では約半月で終わってしまうので、家庭菜園では取り組みにくいものでした。しかし、太陽をいっぱい浴びた旬のイチゴの魅力は格別で、育てたいと希望する人は大変多いものです。幸いなことに、最近ではイチゴ事情がだいぶ変わり、入手が難しかった苗が出回り始めました。また、大手種苗会社からは、新品種を含めた数々の品種の苗が販売されるようになり、栽培に取り組みやすくなったといえるでしょう。

イチゴの植え付け適期は、10月中旬～11月上旬です。早めに苗の購入予約をし、良い苗を確保しましょう。露地やトンネル栽培では「玉交早生」「ダナー」が従来からの代表種ですが、ハウス栽培や、日当たりの良い軒下でプランターを使った早取りでは「章姫」とよのか」などがいいでしょう。そのほか、数多くの新品種が大

手種苗会社から売り出されています。特性と栽培法を確かめて入手してください。

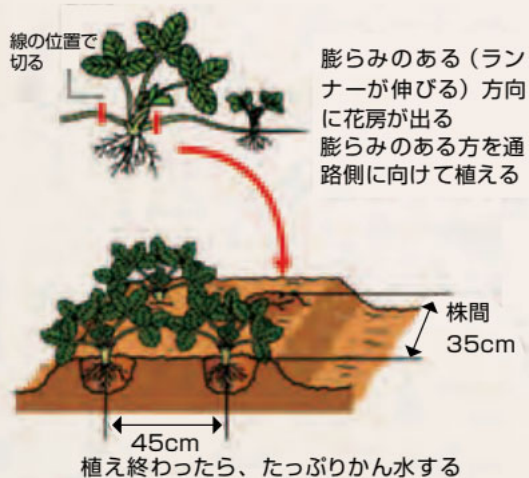
植えつけ20日前までに、セルカ(有機石灰)80g/m<sup>2</sup>ふりかけ堆肥工口(完熟堆肥)400g/m<sup>2</sup>よりりん50g/m<sup>2</sup>を施します。元肥は定植10日前に、油かす50g/m<sup>2</sup>野菜有機S282を50g/m<sup>2</sup>全面に散布し、15～18cmの深さによく耕します。



イチゴの根は肥当りに大変弱いので、植えつけまでに肥料が十分に分解していることが大切なポイントです。プランターの場合は、ピートモス主体の専用培土を用い、肥料

含有量を確認、少ないようならば、事前に油かすと野菜有機S282を少々補います。未熟な腐葉土や有機質肥料を直前に施用することは禁物です。

畑で2列植える場合には、出てくる花房の向きを外側に、プランターの場合は一方を向くように植えつけると収穫が楽にできます。植えつけに当たっては図のように、クラウンが地上に出る程度とし、深植えしないことです。植えつけ後、晴天なら毎日かん水し、乾かさないようにして活着を促します。



追肥は、植え付け2週間後に1回目、その後11月下旬～1月上旬に2回目の追肥をします。そのとき、除草を兼ねて畦の表面を耕しておくようにしましょう。

1回目追肥は、燐消安加里S604を30g～40g/m<sup>2</sup>又は、油かすなら80g/m<sup>2</sup>を施します。  
2回目追肥は、燐消安加里S604を20g～30g/m<sup>2</sup>又は、油かすなら60g/m<sup>2</sup>を施します。

葉かきは、枯れた葉だけを取り除き、植え付け後に伸びてくるわき芽は花をつけることがあるので残してください。冬の間に出てくる花は寒さで黒くなりやすいため早めに引き取って下さい。イチゴは乾燥や過湿には弱いので注意しましょう。